「ムルティクルティ」
――ドイツにおける多文化主義の諸相[1]――

渡　邉　紗　代／ベティーナ・ギルデンハルト

序

数年前から、ヨーロッパ各地では「多文化主義」に対する反動が強まり、「多文化主義」を「並存社会（Parallelgesellschaft）[2]」やテロなど、移民と関わる問題の要因とする言説が勢いを増している[3]。ドイツも例外ではなく、2010年のアンゲラ・メルケル（Angela Merkel）首相の「多文化主義は完全に失敗した」という発言をはじめ、「多文化主義」を否定的に捉える風潮が根強くある[4]。ところが、カレン・シェーンベルダー（Karen Schönwälder）が指摘するように、否定的な評論とは裏腹に「多文化主義」に依拠する政策がドイツでも実際に存在している[5]。「多文化主義」に基づく政策は、ドイツ連邦レベルでは存在しないが、州や市のレベルでは部分的に見られる。例えば、幾つかの都市が「多文化局」を設置し、移民の子供にドイツ語と共に親の母語の学習を推進するプログラムを実施する州もある[6]。そこで本稿では、シェーンベルダーが政治的分野で指摘している「多文化的な政策の要素」ではない分野、とりわけメディアの分野での「多文化主義」について検証を試みたい。なぜなら、政治レベルの傍らに、メディアにおいても「多文化主義」とその要素を見受けることができるからである。例えば、1994年に創立された多文化放送局ラディオ・ムルティクルティ（Radiomultikulti）や2006年３月14日から2008年12月12日までにドイツ第一テレビ放送局（Erstes Deutsches Fernsehen）で放送され[7]、2012年に同様のタイトルで映画化された『トルコ語入門（Türkisch für Anfänger）』のように「ムルティクルティ・コメディ」と呼ばれるジャンルが存在している。これらのラジオ番組、テレビ・ドラマ

『言語文化』15-4：391－419ページ　2013.
同志社大学言語文化学会 ©渡邉紗代／ベティーナ・ギルデンハルト

や映画では「多文化主義」はどのように取り扱われ、またその捉え方は政治的な議論とどのように関係しているのだろうか。ラディオ・ムルティクルティにしても、「ムルティクルティ・コメディ」にしても、多文化の共存を目指すといういわば「多文化主義」の意図を汲んだメディアであり番組であるにもかかわらず、「多文化主義」という「正式」な名称ではなく、「ムルティクルティ」という言葉が使われている。ドイツ語では現在、「ムルティクルティ」は名詞「*Multikulti*」としても、形容詞「*multikulti*」としても使用されているが[8]、この独特な言い方にはどんな意味が託されているのだろうか。この「ムルティクルティ」という言葉に着目し、ラディオ・ムルティクルティと『トルコ語入門』を検証することによって、移民国・ドイツに関する研究では今まであまり注目されていなかった側面を明らかにすることを目的としたい。

Ⅰ. ドイツにおける「多文化主義」と「ムルティクルティ」

多文化社会や多民族国家において安定的な社会的統合のために考案された「多文化主義」[9]はカナダで発祥[10]したが、ドイツでは1980年代後半から「多文化主義」の概念が議論され始めている。もっとも、移民によって国家や国民を形成してきたタイプのカナダと、いまだにその路線が確固たるものになっていないドイツは異なったタイプの「移民国」であるために、同じ視点で「多文化主義」を語ることはできない。しかし、カナダやオーストラリアなどで「多文化主義」が政策に採り入れられ、「多文化主義」の主張が世界に波及したと同じくドイツにも影響を及ぼしている。例えば、左派、特に緑の党（Die Grünen）は「外国人」や「移民」をドイツ社会に多様性をもたらすプラスなものとして認識し、「多文化主義」を肯定的な意味合いで捉えている。これに対し、キリスト教民主同盟（CDU）をはじめ、保守派では「多文化主義」は「共通の価値観の喪失」であり、在独「外国人」がドイツ社会の秩序を混乱させているという否定的な捉え方をしている。こういった政治的なぶつかり合いにより、「多文化主義」の意味合いは常に議論の対象であり続けている。このような政治的な議論に対して、ユルゲン・ハーバーマス（Jürgen Habermas）は「多文化主義」に関する論説の中で、保守派の政治家たちが「ドイツは移民国ではない」と主張し続けることを批判し、ドイツの移民問題を

処理する方法の欠陥が言語や文化を中心とする「民族同胞」という認識に根差していることを指摘[11]している。このように「多文化主義」に対して肯定派と否定派という両極端な政治的主張や論争は絶えないが、これこそがドイツにおける「多文化主義」の議論の特徴だと言えよう。「多文化主義」について議論が絶えないのはドイツに限ったことではない。隣国のフランスでも、「多文化主義」は議論の対象になっている。しかし、フランスでは「共和主義」と「普遍主義」への根強い信念を背景に、これを否定的に捉える勢力が圧倒的に強く、「多文化主義者」という言い方は、フランスの普遍主義を裏切る者という意味合いでさえ使われている[12]。つまり、フランスでの「多文化主義」の主張や議論はドイツとは異なったものであり、概念が同様であっても、それに付与される意味合いはそれぞれの国における理念や政治的争いにより様々である。

ドイツにおいては、「多文化主義」を巡る議論は単なる言葉上の問題ではなく、「ドイツを移民国として認めるか否か」という政治的な課題に繋がり、具体的な政策に影響を及ぼした。例えば、このような中で、1989年にフランクフルト市では多文化共存の支援を目的に「多文化局（Amt für multikulturelle Angelegenheiten）」が開設されているが、この多文化局について岡本奈穂子は次のように指摘している。「フランクフルト市は、新しい局を『外国人局』でも『移民局』でもなく、『多文化局』と命名した。個々の施策以上に何よりもこの名称が、市の中立性と多文化共生推進という強いメッセージを体現している。[13]」つまり、局の名称からは、フランクフルト市、ひいてはドイツが、すでに「多文化社会」になったことを強調しながら、「多文化的」を肯定的な意味合いで制度化しようとする試みがわかる。

実際に「ムルティクルティ」という言葉がドイツ語に登場したのは、翌年の1990年である。「ムルティクルティ」の命名者は政治学者クラウス・レッゲヴィー（Claus Leggewie）であるが、1990年に出版され、すぐに版を重ねた著書『ムルティクルティ：多民族共和国のためのルール[14]』でこの言葉が初めて使われた。本人によると、ドイツ社会の現状を描写するために、「ムルティクルティ」というアメリカのジャズ・バンドの名称を転用し、ドイツ語に「輸入」したという[15]。レッゲヴィーの立場は、フランクフルトの多文

化局の設置精神と一致している。これは著書の中の一つの章を当局とその初代の所長ダニエル・コーン＝ベンディット（Daniel Cohn-Bendit）に割いていることからもうかがえる。レッゲヴィーは「多文化社会」をすでに現実になったものとして認識し、その意義や意味を右派のように否定せず、しかし左派のように無邪気に理想化もしないという姿勢で捉えている。彼は皮肉を込めて、「ムルティクルティ」という新しい造語を本の題名に掲げ、「多文化主義」に付与されてきた、極端で相容れない二つの意味合いを乗り越えようとし、現実的かつ建設的な捉え方を呼びかけている。この著書の前書きには、次のような説明がある。「『ムルティクルティ』は、我々に対して灰色な日常生活を美化するわけでもなく、全てを最悪で見通しのきかない状態に置き換えるわけでもない。ムルティクルティは、純粋な連帯感の源でも制度化された人種間の戦争でもない。多文化社会は右翼でも左翼でもなく、右翼の民族集団イデオロギーや社会主義者の代替のための悪質な題材にさえならないのだ。多文化社会は常設の工事現場であり、新たな『安定した暫定制度』である。それは、改革への展望を創り出しているが、時おり停滞や不愉快さをももたらす。[16]」

すでに1990年にドイツの「多文化主義」や「多文化社会」についてこのような意見が述べられていたにも関わらず、これ以降も不毛な議論が続いている。「ムルティクルティ」という言葉ははやくもドイツ語の語彙に根付き、一方では肯定的に多様な文化が共存する社会という意味合いで、他方では「多文化社会」を無邪気に理想化する人々を揶揄する言葉として使われてきた。これは言葉の響きによるところもある。ドイツでは、人にあだ名をつける際によく「イ」を語尾に付け加え、元になっている言葉を可愛くする効果をもたらす。「ムルティクルティ」も元になっている「多文化主義」に軽妙な響きを与えている。それゆえ、「多文化主義」を肯定する際にも、「多文化主義」を「軽率」なものとして非難する際にも、「ムルティクルティ」がよく使われている。後者には例えば、セイラン・アテシュ（Seyran Ateş）の『多文化の幻想[17]』があるが、この中で、アテシュは「ムルティクルティ」の負の側面を指摘している。多文化が存在することこそが最良のものであると見なすあまりその弊害に気づかない、あるいはその弊害をも覆い隠してしまうこと

を彼女は批判する。つまり、「ムルティクルティ」は無邪気さを装った偽善的な理想主義であり、「並存社会」を助長させるものだ[18]との指摘である。

アンゲラ・メルケル首相の「多文化主義は完全に失敗した」という発言からも「多文化主義」に否定的な姿勢がうかがえる。メルケルも「ムルティクルティ」という言葉を使い、さらに「移民に統合の支援をするだけでなく、要求しなければならない」と述べている。この発言からは、多文化社会を理想とする無邪気な「ムルティクルティ」ではなく、移民や移民を背景にした人々（Migrationshintergrund）をなかば強制的にでもドイツ社会に「統合」していく社会制度が必要なのだとする姿勢が見て取れる。つまり、「ムルティクルティ」は「多文化主義」のスローガンとしてドイツ社会に浸透したが、「ムルティクルティ」の名のもとに社会的な「統合」を阻む要素[19]に対してでさえも寛容であり続けなければならないという状況があることに対する批判であり、このような「ムルティクルティ」はドイツ社会にとっては失敗であり不必要なものだと指摘しているのである。そういった意味で、保守派は「多文化主義」にも「ムルティクルティ」にも否定的な立場をとり続けている。

しかし、このような政治的な議論とは異なり、メディアの分野では、「ムルティクルティ」はいささか違う意味合いで使われている。では、メディアに目を向け、「ムルティクルティ」がどのように表象されているかを具体的な事例をもって検証していこう。

Ⅱ. ラディオ・ムルティクルティ

ラディオ・ムルティクルティの創設経緯と目的

この章では「ムルティクルティ」を掲げ活動しているドイツのラジオ局ラディオ・ムルティクルティが、「ムルティクルティ」をどのように定義し、「多文化主義」が「並存社会」を助長しているという批判をどのように受け止めているのかを見てみよう。

ドイツでのラジオ利用率は日本とは異なり非常に高い。例えば、1日当たりのラジオの聴取時間を比較してみると、ドイツでは平均して平日に3時間19分、土曜日に2時間50分、日曜日に2時間21分[20]、日本では週平均で1日30分[21]（表1参照）であり、ドイツではラジオがより身近な存在であること

がわかる。５～20時の間のテレビの利用率と比較してみると、18～20時の間だけはテレビを利用する人の割合が高いが、それ以外の時間帯ではラジオを利用する割合が高い[22]。また、性別によるラジオ利用率に大きな差はないが、年齢別に見ると10代は平均して１日１時間程度の利用で、他の年代と比較すると利用率は低い。近年の傾向として、ドイツでは特に若年層はインターネットでラジオ放送を聴取し[23]、ラジオの聴取方法には変化が見られる。このように、年齢、性別、曜日を問わずラジオの利用率が高いということは[24]、ラジオが果たす役割は非常に大きくその影響力は大きいと言える。よって、「多文化主義」や文化的多様性の共存を浸透させようとする試みの一手段として、ラジオ局がその役割を果たす可能性は大きい。

多文化放送局ラディオ・ムルティクルティは、1994年９月にベルリンのベルリン・ブランデンブルク放送（rbb）から創設されたひとつのプロジェクトであり、ドイツ連邦共和国公共放送局連合（ARD）の傘下にある公共放送局[25]である。各公共放送局ではそれぞれ５～６のチャンネルを持ち、独自に番組を制作・放送しているが、ラディオ・ムルティクルティもその中のひとつである[26]。ラジオ局の名称が「多言語放送局」ではなく「多文化放送局」となっているのは、ただ単純に多言語による放送を実施しているラジオ局ではなく、音楽や情報を含め多様な「文化」を発信することを目的に掲げているためである。ドイツ人と外国人や移民の間にある文化的な摩擦や誤解の解消、ならびに異文化の伝達を使命としている。ドイツ人と移民の「統合」の促進を目的に掲げていながらも、「ムルティクルティ」という名称によって、その使命の重さよりも、「多文化」の楽しさが強調されているように見て取れる。

また、聴取の対象者を外国人や移民だけに限定するのではなく、全てのドイツの住民へと広げ、さらには、番組を世界へ発信していこうという姿勢が常にある。これらの点が他の多言語放送局との違いであり、ラディオ・ムルティクルティの最大の特徴である。放送はドイツ語と20の言語[27]で行われている。また、1998年以降24時間放送を実施し、ポッドキャストを含めインターネットでの配信を実施し聴取者の利便性を図っている。つまり、ラディオ・ムルティクルティの目的は、それぞれの言語を尊重しながら、その境界線を

乗り越え、お互いの文化に興味を持ってもらうことにある。この目的を見ると、「ムルティクルティ」が「並存社会」を助長しかねないという批判が必ずしも的を射たものではないことがわかる。

しかし、このような画期的な試みとは裏腹に2008年12月に資金不足のためこのラジオ番組は終了されてしまう[28]。ただし、番組存続を願いラディオ・ムルティクルティのDJや音楽家たちの署名活動が行われた結果、「ラディオ・ムルティクルティ」という名称で存続することはできなかった[29]ものの、これまで番組の一部を共有・同時放送していたケルンのラジオ局、フンクハウス・ヨーロッパ（Funkhaus Europa）[30]が、ラディオ・ムルティクルティの活動を引き継ぎ、2009年1月以降も「多文化放送局」としての活動は続けられることになった[31]。

フンクハウス・ヨーロッパも西ドイツ放送（WDR）に属する公共放送局であり、番組の制作・放送はrbbとWDR、ラジオ・ブレーメン（RB）が共同で行っている。それゆえ、ベルリンが主な活動拠点であったラディオ・ムルティクルティに対し、フンクハウス・ヨーロッパに引き継がれた後はベルリンを含めブランデンブルク、ブレーメン、ノルトライン＝ヴェストファーレン、ニーダーザクセンの一部でも放送され、放送地域がより広範囲となった。ただし、実際はインターネット配信を行っているために、場所や時間の制限なしに聴取することが可能である。フンクハウス・ヨーロッパへの統一後も「ラディオ・ムルティクルティ」として活動していた時期の目的と変わりはない。フンクハウス・ヨーロッパによると、多様な「国民と民族」の共存のためにグローバルな音楽と情報の提供が目的であり、「グローバルな生活のための基盤（Plattform）を提供し世界的な視点でドイツを見ていく」ことが目指されている。このラジオ番組自体が「多彩な社会の鏡」として捉えられていると言うが、この文言からは、多文化社会の存在を否定する主張に対して、番組を通して、実際のドイツ社会では多文化がすでに存在しているのだという現状を映し出す鏡として、そして多文化の共存という理想像を映し出す鏡を差し出したいという意志が感じられる。しかし、一方、放送言語数はフンクハウス・ヨーロッパに一本化したことで減少し、現在はドイツ語と14の言語[32]で放送されている。

ラディオ・ムルティクルティの活動を引き継ぐ以前のフンクハウス・ヨーロッパを見てみると、もともとは1998年８月にケルンでWDRのひとつのチャンネルとして創設され[33]、当初から24時間放送でグローバルな音楽と共に多言語での放送を実施していた。移民や外国人をも聴取の対象にした番組制作をしている点はラディオ・ムルティクルティと同様であるが、聴取者の対象をグローバル・ポップに興味を持っている30 〜 50歳代に絞っている点が異なっている。ただし、他のドイツのラジオ局でもフンクハウス・ヨーロッパと同様に聴取の対象者を絞り込むような番組の制作をしている。ほとんどのラジオ局の番組は音楽とDJの話によって構成されているが、放送する音楽のジャンルを特定し、一つのチャンネルで多様なジャンルの音楽を混合して流すことはしない。そうすることで、自然とそのチャンネルの聴取者が限定されることになる。それゆえ、フンクハウス・ヨーロッパが特異な放送形態をとっているというわけではなく、逆にラディオ・ムルティクルティの放送形態の方が特殊であると言える。一つのチャンネルで多種多様な音楽を放送するという形態は日本のほとんどのラジオ局と同様であるために、ラディオ・ムルティクルティの放送形態に一見斬新さがないように感じられるが、ドイツの他のラジオ局と比較するとその違いがわかる。2009年以降、このような性質のラディオ・ムルティクルティの番組を受け継いだフンクハウス・ヨーロッパは、それ以前の番組ほど聴取者を絞り込むことはなくなった。

これらの一連の流れを見ると、「ラディオ・ムルティクルティ」という名称でラジオ局は存続できなかったものの、その趣旨を受け継いだフンクハウス・ヨーロッパが活動拠点をベルリンからそれ以外の都市や州にも広げ、結果としてラディオ･ムルティクルティの活動がより広まった。その意味では、「地域的」な活動が「超地域的な」活動へと変わったと言える。

ラディオ・ムルティクルティとフンクハウス・ヨーロッパの活動

では、具体的な活動内容を見てみよう。統一前のラディオ・ムルティクルティも統一後のフンクハウス・ヨーロッパもインターネット配信と24時間放送を実施している。これは聴取者にとって場所と時間の制限を受けないという利点があり利便性がある。さらに多言語で放送することによって、音楽を

含め多様な文化を発信するという娯楽的な要素と日常生活に必要な情報の入手という生活的な要素をラジオ局は聴取者に提供している。移民や移民を背景にした人々にとっては母国の文化に触れ自分たちの母語によって情報を正確に入手できる機会となる。この趣旨は、近年の語学教育とも一致している。「統合コース」の設置によって、移民のドイツ語習得は義務化されたが、その反面、母語を保持しようとする人々への抑圧にならないように、移民の子供へのバイリンガル教育の取り組みも進められている[34]。

具体的な番組は次のような構成になっている（表2参照）。例えば、時間帯によってはドイツ語を全く使わずドイツ語以外の言語による放送が行われている[35]。多言語による放送を実施しているが、各言語の番組内では主にその言語で歌われている曲やその言語圏の音楽も流している。これらの番組以外は基本的にドイツ語で放送されているが、流す音楽や情報、テーマなどは多種多様である。また毎日6～17時の間、一時間ごとに「ヨーロッパのニュース」をドイツ語と共にフランス語、英語でも伝えている。

月～金曜日16～18時に放送される「新しいこと（Nova）」では「ヨーロッパ」をテーマとした政治や社会、スポーツの分野の話題を提供し、出来事や事件、その背景に解説を加えている。例えば、ヨーロッパと移民の関係なども頻繁に取り上げられ、スカーフ着用を巡る問題や、ラマダーン期間の説明などについても番組内で取り上げられている。

ラジオ放送以外の活動も行われており、コンサートの開催や映画の上映などがある。例えば、2012年9月20～30日にはアフリカの映画フェスティバルが開催された。アフリカ20カ国の85作品が上映され、この中にはドイツではまだ公開されていない映画も含まれていた。現在のチュニジアやエジプトの政治状況、アルジェリアのフランスによる植民地化などのテーマを扱ったドキュメンタリー映画などもある。また、「政治、文化、社会」のテーマでインタビューや討論会、アンケート調査なども随時行われ、その経緯や結果はラジオ番組内で放送、生中継、報告も行われる。他にも、生活の娯楽の面でのサービスとして「映画、料理、本、旅行、ゲーム」のカテゴリー別に情報を提供している。

映画上映を含めこれらの活動は、娯楽とともに政治や社会問題に触れる機

会と情報を提供し、ある意味で「気づきの場と機会」もしくは「学びの場と機会」を創り出している。日常生活の中での政治や社会的な背景を考慮しつつ、「ドイツの多様性」ならびに「世界の多様性」を多様な「文化」を手段として聴取者に伝えようとしていることがわかる。聴取者を「ドイツ人と移民」という枠組みにはめることなく、多様な「ドイツの住民」として扱うことで、いかに「共存」していくのかということを模索していることがわかる。

番組の制作・放送に携わるスタッフに目を向けると、番組の編集や司会者は総勢134人で移民を背景にした人々が多い。例えば、「フンクハウス・ヨーロッパとは？」という問いに対するスタッフの声を見てみると、「反人種主義」、「自由な言語空間」、「諸文化のミクロな世界」、「テレビ放送のための模範となる」などの意見があり、多言語や多文化によって番組の制作・放送をしていることに意義を見出している人が多い。

ラジオ放送と「多文化主義」

では、これらのフンクハウス・ヨーロッパの活動に「多文化主義」を照らし合わせてみよう。ドイツでのラジオの利用はモバイルメディアとして第1位であり、76％の人々がラジオを聴いている[36]。つまり、外出中でも車や電車などの移動中、職場などで聴取している人々も多く、ラジオ放送だけに集中するのではなく、いわゆる「ながら聞き」が多いことがわかる。もちろん、ラジオ放送の性質上、家の中でもシャワーを浴びながら、あるいは料理をしながら、新聞を読みながらなど何らかの作業をしながらラジオを聴いていることが多いことは容易に察しがつく。人々の日常生活の「バックミュージック」として多様な文化が音楽と共に「さりげなく」放送され聴取者の耳に届くのであれば、聴取者が「多文化主義」について考えるという直接的な機会にならなくても、聴取者が多文化の存在に触れることで、異文化がかけ離れた存在ではなくより身近な文化だと認識する機会になる。その意味では、フンクハウス・ヨーロッパは「多文化の共存」のための一翼を担い、その役割を果たしていると言える。

その反面、前述した「ムルティクルティ」が「並存社会」を助長するという批判と同様に、「エスニック・メディア」が移民とドイツ社会との隔離を

生むとの指摘[37]がある。ただ、「エスニック・メディア」を移民の故郷で制作されている番組、あるいはドイツ国内で移民向けに制作されている番組と定義する[38]ならば、フンクハウス・ヨーロッパは聴取の対象者を移民と限定しているわけではなく、移民とドイツ人双方を対象としている点で「エスニック・メディア」には該当しない。あくまでもフンクハウス・ヨーロッパの活動目的は移民とドイツ人との「統合」である。移民や移民を背景にした人々に統合コースでのドイツ語習得の義務づけが行われている中で、「統合政策」が「同化政策」にならないためにも移民の母語保持を支援するというドイツ全体の流れに照らし合わせて見れば、その趣旨を汲んだ活動をしているラジオ局であり、多言語・多文化放送を実施する意義はそこにあると言える。

さらに、ラディオ・ムルティクルティやフンクハウス・ヨーロッパが創設された時代背景を見てみると、1992年のホイヤースヴェルダやロストックでの難民収容施設の襲撃、1993年のゾーリンゲンでのトルコ人一家への放火などの、いわゆる外国人排斥運動や極右勢力の台頭に代表されるような動きがドイツでは1980年代後半から1990年代初頭にかけて見られた。ドイツ国内外からこのような社会状況を危惧し状況を打開する必要があるという声があがったことは言うまでもなく、異文化を背景にした人々と共存していこうとする「多文化主義」の影響もあり、ドイツ全土で「外国人」との共存について模索が始まった時期でもある。このような社会状況下でラディオ・ムルティクルティもフンクハウス・ヨーロッパも創設されたので、前述したように、ドイツ人と移民やその背景を持った人々との間にある文化的な摩擦や誤解の解消という活動目的をこれらのラジオ局は掲げているのである。さらに、2001年の同時多発テロ以降、「イスラーム＝テロ」とみなす傾向が強まったことや、「イスラーム＝女性蔑視」という偏見などが根強くあることなども考慮し、誤解なくイスラーム文化を発信する活動も行われている。

このような社会的な状況も考慮したラジオ局の活動は、「多文化主義」の実践という大義名分を高々と掲げているかのように一見思われるが、しかし実際のラジオ番組を聴取すると「多文化主義」を浸透させようとするラジオ局側の明確な意図や強烈なメッセージ性をあからさまに感じる「重さ」はない。むしろ、世界の文化は多様であり、またドイツも多様な社会なのだとい

うことを音楽に乗せて発信する「軽さ」が伝わってくる。ここからはラジオ局の「ムルティクルティ」という名称も含め、「ムルティクルティ」を肯定的に捉え、その楽しさを強調していることがうかがえる。

Ⅲ.「ムルティクルティ」と「娯楽」

では次に、ドイツにおける「多文化主義」のもう一つの側面として、「娯楽」と「ムルティクルティ」との関係を見てみよう。数年前から、多文化のぶつかり合いや摩擦を軽妙なタッチで面白おかしく取り扱っている映画やテレビ・ドラマが増え、映画評では「ムルティクルティ・コメディ」という概念がよく使われるようになってきた[39]。「多文化主義」を巡る政治的な議論の深刻さを考えると、こういった「ムルティクルティ」を題材にしながら「コメディ」というジャンルに属し、「多文化主義」を一種の「娯楽もの」として提供する映画やテレビ番組の存在は興味深い現象である。その「娯楽性」がどのように成立し、また「多文化主義」の社会的な実践にどのような影響を与えているかを考察していきたい。

ドイツでは、「娯楽」を否定的に捉える傾向が伝統的に長く存在している。アドルノとホルクハイマーの「文化産業」批判は言うに及ばず、「娯楽」や「マスメディア」を危険、またはあまり価値のないものと見なす風潮が根強くある。この立場から「娯楽」と「多文化」を関連づけると、確かに負の側面がしばしば見受けられる。例えば、少数派の異文化を単なる「娯楽」として位置づけることは一方的な「異国趣味」にほかならず、この背景には多数派社会の少数派社会に対する差別が存在している。また、少数派の「文化」の中から食べ物、ファッション、祭りなどの娯楽性の高い、消費しやすいもののみが多数派社会によって評価されているという表面的な「多文化主義」がここかしこに見られる[40]。しかしその反面、「多文化」を「娯楽」に直結させることが結果的によい効果をもたらすこともある。例えば、異文化や「多文化」の「娯楽性」をより多くの人々が認識することにより、これらを「未知の物＝脅威」として拒絶することが少なくなる可能性がある。さらに、ポピュラーカルチャーの研究の影響もあり、「娯楽」を一概に否定的に捉えず、様々な立場から考察する研究が近年ドイツでも増えている。例えば、その中のひ

とりヴェルネル・フリュー（Werner Früh）は「娯楽」という現象をコミュニケーションとメディア学の立場から多角的に把握することを試み、娯楽理論を提示している[41]。本稿ではこの娯楽理論を参考に、娯楽を最初から否定的に捉えることなしに考察を進めることにしたい。では、まずフリューの理論に依拠しつつ、「娯楽」を定義してみよう。

「娯楽」とは何か

フリューは「娯楽」を動的な情報処理から生じるコミュニケーション現象として捉え、次のように説明している。受容者がメディアの提供しているものを「娯楽」として認識するためには、基本的に「好ましい体験」が必要である。「好ましい体験」には「気分転換」「自主性」「コントロール」という三つの側面がある、とされる[42]。「気分転換」は人間共通の知覚的な要素であるが、それは必ずしも、何らかの目的意識を持った行動に限定されることはない。例えば、聴取者が移動中、あるいは何らかの作業をしながらラジオ番組を聴くといういわゆる「ながら聞き」も「娯楽感覚」に繋がる。「自主性」とは、どのテレビ番組やどのラジオのチャンネルを選ぶのかという視聴者の決定が自主的な選択であることを指している。「コントロール」とは、受容者が「メディア」によって提供されているものをコントロールすることよって自分自身の感情的なバランスを保つことである。つまり、ある番組を「好ましいもの」と感じ、これに「気分転換」を求めるかどうかは、受容者次第である。例えば、同じ受容者がある日コメディを「娯楽」として認識することもあれば､ある日悲しい恋愛ドラマを「娯楽もの」として選ぶこともある。あくまで「娯楽」は受容者の自主的な感覚によるものである。この点が、フリューの娯楽理論と、受容者を消極的で、メディアによって一方的に支配されている者と見なす伝統的なメディア理論との一番の大きな違いである。フリューの理論のもうひとつの大きな特徴は、「娯楽」は決して、文学やテレビ番組、つまり「媒体」自体が有している性質ではないという指摘である。フリューによると、「媒体」は「娯楽の可能性」を含蓄しているだけであり、「娯楽」が成立するためには、「人」「媒体」「状況」という三つの要素が適切な関係にあることが不可欠である、とされている。つまり、実際に「娯楽」

となるためには、その受容が適切な「状況」で行なわれ、受容者がそれ自体を「娯楽」として感じる必要がある。本稿では、フリューの言う「状況」を主として社会的な状況として捉えることにする。

この理論に基づいて、テレビ・ドラマと映画『トルコ語入門』を一例として「ムルティクルティ・コメディ」を分析することにしたい。そこで、まず次のような課題が浮かび上がってくる。ドラマと映画が「媒体」として持っている「娯楽の可能性」とは何か。受容者がそれを実際に「娯楽」として認識する条件、「人間」と「状況」との適切な関係はどいうったものなのだろうか。

テレビ・ドラマと映画『トルコ語入門』

テレビ·ドラマ『トルコ語入門』は、前述したように2006年３月14日から2008年12月12日までにドイツ第一テレビ放送局で放送され、2012年に同様のタイトルで映画化された。ドラマの放送時間は火曜日から金曜日までの18時50分から放送され、一つのエピソードの長さは25分間、全部で52のエピソードが、３部に分かれて放送された。そこではドイツ人とトルコ人の「パッチワークファミリー（Patchworkfamilie）」の生活が描かれている。離婚したドイツ人女性ドーリスとトルコ人男やもめメティンが同棲することからストーリーが始まる。ドーリスには娘レーナと息子ニールズ、メティンには息子チェムと娘ヤグムルがいる。ドーリスとメティンの関係はうまくいきながらも、「兄弟」になった子供同士のぶつかり合いが生じる。紆余曲折を経て４人の少年少女は少しずつ仲良くなり、成長していく。ドラマの最終回では、大人になったレーナとチェムがペアになり、子供が生まれるところまで描かれている。

2012年に上映された映画では、二番煎じを防ぐために、ドイツの母子家庭とトルコの父子家庭の出会いがゼロから語られている。両家族はタイで休暇を過ごそうとし、偶然に飛行機で出会うが、飛行機が墜落してしまう。ドーリスとメティンが先に救出され、高級ホテルで少しずつ仲良くなっている側ら、子供たちはある離島に流され、ジャングルの中で救出されるまで過ごすことになる。最後には、ドーリスとメティン、そしてレーナとチェムがそれ

ぞれの先入観や誤解を乗り越えてカップルになり、ドラマと同じく映画もハッピーエンドで終わる。映画の脚本はドラマと同様に、ボーラ・ダシュテキン（Bora Dagtekin）が執筆した。映画の役はニールズ役以外、同じ俳優や女優が演じている。では、『トルコ語入門』が「ムルティクルティ・コメディ」たりえる要素が何であるのかを見てみよう。

「コメディ」としての「ムルティクルティ」

「ムルティクルティ」という要素は、トルコ人とドイツ人からなるパッチワークファミリーという設定により成り立っているが、「コメディ」という要素がどのように生じているのか、言い換えれば『トルコ語入門』はどのようなネタで視聴者を笑わせようとしているのだろうか。2010年にドラマの第3部の放送にあたり南ドイツ新聞（Süddeutsche Zeitung）では、笑いの手法に関して次のように批評されている。「ファンの間ではTfA（Türkisch für Anfänger）と省略され2006年から放送されているシリーズは、普段テレビの娯楽ものにそっぽを向く人でさえも釘付けにして成功している。ステレオタイプを粋で洗練された遊戯の対象とし、風船のように膨らませ、そして破裂させている。ストーリーは時には荒唐無稽ではあるが、さえないコメディでは決してない。[43]」つまり、ステレオタイプを滑稽化あるいは風刺化することによって、「笑い」が生じるということである。シュピーゲル（Der Spiegel）では、南ドイツ新聞の批評と酷似した表現で次のように述べられている。「ばかげたことが統合を促す効果がある。文化的なステレオタイプを飲み込み、カラフルなガムのように膨らませて、そして破裂させるのを楽しむ。[44]」。

では、具体的に『トルコ語入門』ではどのようなステレオタイプが起用され、それがどのように滑稽化されるのだろうか。エルフルト大学で行なわれた研究[45]を参考に『トルコ語入門』におけるステレオタイプを見てみると、『トルコ語入門』の登場人物がどのようなステレオタイプを体現しているかがわかる。さらにドイツ人とトルコ人（調査対象84人）が互いに持っているステレオタイプと先入観が調査され、そのステレオタイプがドラマ鑑賞を通して変わっていくかどうかがエルフルト大学の研究で明らかになった。この調査

結果では、ドイツ人の被調査人の中で、在独トルコ人に対して以前より好感を抱くようになった人が若干いたこと以外、ドラマ鑑賞の効果はあまりないということが判明した。ステレオタイプについて見てみると、実際にドイツ人がトルコ人に対して抱き、ドラマで体現されているステレオタイプとして「トルコ人は過激なイスラーム教徒である」、「トルコの男性は女性を監視する」などがあった。逆に、トルコ人がドイツ人に対して抱き、ドラマで体現されているステレオタイプとして「ドイツの女性はいい主婦ではない」、「ドイツの女性は淫らだ」などが挙げられている。このステレオタイプがどのように滑稽化されているのかを主人公の一人、母ドーリスを例に見てみよう。ドーリスは料理や家事が苦手、自由奔放で解放されたドイツ人女性の典型である。この意味では、トルコ人がドイツ人の女性に対して実際に抱いているステレオタイプと一致している。しかし、これだけでは、滑稽さは生まれない。エルフルト大学の調査ではあまり注目されていないが、1968年の学生運動や1970年代の女性解放運動の影響がドーリスの特徴に見受けられる。ドーリスが体現しているものは、行動パターンとして実際に出来上がったものであり、単なるステレオタイプによってのみ創られたキャラクターというわけではない。つまり、登場人物のキャラクター構成には、トルコ人とドイツ人の相互的なステレオタイプのみならず、ドイツ社会の中で型として形成されてきた行動パターンも含まれている。このような型が誇張されたり風刺されたりしている。例えば、ドーリスが1968年の学生運動の精神を受け継ぎ、子供にはルールを与えず自由に育ってほしいあまりに、奥手の娘レーナに夜にディスコに行くように勧めたり、彼氏との性的な関係を促したりする。その誇張や風刺が笑いのネタになっている。つまり、『トルコ語入門』のコメディ性は、ステレオタイプだけで成り立っているわけではない。ドーリスのみならず、登場人物は皆それぞれ一つの型に従って行動しようとしているが、皆それぞれの理想像には結局従え切れず、失敗している。女性解放と男女平等を掲げながらも、ドーリスはメティンと出会い、トルコ人男性が家庭的な女性を好むというステレオタイプに囚われ、メティン自身は決して期待していないにもかかわらず、必死に完璧な主婦を演じ始める。チェムは強い男性を演じながらも、不安をたくさん抱いている。その人間らしい、時には人間く

さい振る舞いを通して、登場人物は視聴者にとって親近感を抱けるキャラクターになる。笑いのネタは、行動の元になっている型とその型とのずれである。

登場人物やストーリーによって、民族は一つの「型」に過ぎないことが暗示されている。このことはトルコ人を演じている役者が、実際皆トルコ人ではないことによってさらに強調されている。例えば、チェムを演じているエリアス・エム・バレク（Elyas M'Barek）はチュニジア人の父とオーストリア人の母を持ち、ヤグムルを演じているペーガ・フェリドニ（Pegah Ferydoni）はイラン系のドイツ人である。トルコ人を演じている全ての役者が母語としてドイツ語を話していることがドイツはすでに多文化社会になったことを示している。

テレビ・ドラマ『トルコ語入門』と映画『トルコ語入門』の受容状況

新聞やテレビ関係者は、テレビ・ドラマも映画もおおむね好意的に評価している。さらに、ドラマ『トルコ語入門』は多くの賞も受賞している。2007年には「娯楽」というカテゴリーで、アドルフ・グリンメ賞（Adolf-Grimme-Preis）と統合推進のツィヴィス・ヨーロッパ・メディア賞（Civis –Europas Medienpreis für Integration）を受賞した。アドルフ・グリンメ賞は、ドイツのテレビ番組に与えられるもっとも名声のある賞のひとつであり、1964年から「テレビという媒体を卓越した形で役立たせ、内容と方法上で見本に成り得る作品[46]」に授けられている。統合推進のツィヴィス・ヨーロッパ・メディア賞は1987年に「番組の作成者に統合と文化的多様性というテーマに興味を持ってもらい、ヨーロッパで形成している移民社会に対する革新的かつ専門的な取り組みを促進する[47]」という目的でフロイデンベルグ財団、ドイツ連邦政府とドイツ第一テレビ放送局によって設置された。評論でも『トルコ語入門』は前述の南ドイツ新聞の引用のように評価されている。しかし、ドラマの視聴率は最初は決して高くなかった。ドラマの18時50分というゴールデンタイムの放送時間と各エピソードの連続性を考えると、視聴者によるテレビチャンネルの選択は意識的に行なわれ、ラジオの「ながら聞き」とは異なり目的意識が強く働いていると言えよう。ゆえに、視聴率は、受容者が番組

を「娯楽」として認識したかどうかの一つの目安になる。12％のシェアを期待したドイツ第一テレビ放送局の予想を裏切り、『トルコ語入門』の視聴率は10.1%にしか及んでいない[48]。第２部の放送を見合わせる運びになったが、続きの放送を要求するファンによる署名運動をきっかけに、第２、３部も引き続き放送されるようになった。ところが、視聴率が伸び悩んだテレビ・ドラマに対して、６年後の2012年に上映された映画『トルコ語入門』は、空前の成功を収めた。上映開始６週間後、観客の数は200万人を超えた[49]。媒体上、テレビ・ドラマと映画を直接比較するのは難しいが、脚本家やほとんどの役者、笑いのネタも共通しているということを考えると、視聴率の違いは「媒体上」の相違よりも、外的な要因によると推測できる。前述したフリューの「娯楽理論」に基づいてドラマの低視聴率と映画の成功を解釈してみよう。

『トルコ語入門』のテレビ・ドラマや映画も「娯楽番組」として制作されているため、「娯楽の可能性」を含蓄しているはずであった。しかし、2006年に多くの「人間」はそれを「娯楽」として認識しなかった。その理由として、「受容者」の個人的な嗜好、ならびに受容が行われた当時の社会的「状況」にも一因があったと考えられる。つまり、「媒体」、「人間」「状況」は、2006年には適切な関係になかったのに対し、2012年には「娯楽」の条件が揃い、受容状況が変わったと言えよう。あるインタビューで脚本家ダシュテキンがテレビ･ドラマ『トルコ語入門』に関して、興味深い「裏の情報」を披露している。「一部は2006年３月に放送予定だったが、それが、デンマークの風刺画論争の直後だったので、ドイツ第一テレビ放送局が爆破されかねないと警鐘を鳴らした。そのために、内容を再度確認せざるをえなくなった。そこで、映画学校の斡旋で、拘留中の過激イスラーム教徒と連絡し、番組を見てもらうことになった。その人は番組には愛嬌があり、安全だということを保障してくれた。[50]」ダシュテキンが述べているムンマドの風刺画論争とは、2005年９月にデンマークの新聞ユランズ・ポステン（Morgenavisen Jyllands-Posten）が12枚のムハンマドの風刺画を掲載したことに端を発し、世界各地域のイスラーム国において、激しい抗議行動を招き、その波紋が西欧各地に及んだ事件である[51]。この影響で当時、異文化を笑いの種にすることに対する懸念が生まれたが、ドイツ第一テレビ放送局が『トルコ語入門』の放送に

踏み切ったのは、一方的かつ軽蔑的にイスラーム教を風刺対象にしているユランズ・ポステンと『トル語入門』の「笑い」は次元の異なるものであると認識したからであろう。

前述のインタビューでは2012年の映画上映にあたって、同じような確認作業があったかという質問に対し、ダシュテキンは「いいえ。今は外国人という題材は居間で楽しめるようになった。[52]」と答えている。外国人に関する番組が「居間で楽しめる」ようになったという言い方は、外国人や移民というテーマの特殊性が薄れ、普通に放送されるようになったことを示している。さらに、テストの必要性がなかったことは、2006年と比べ、異文化を扱うことの危険性が軽減したことを暗示している。この「状況」の変化により、「人間」の「娯楽認識」も変わり、2012年における映画上映の際、より多くの視聴者が「ムルティクルティ・コメディ」を「娯楽」として認識するようになったと言えよう。前述のエルフルト大学の調査では、ドイツ人の被調査人はドイツ人を対象にしたネタについて笑えたが、一方、トルコ人はトルコ人関係のネタについてあまり笑えなかったという結果が明らかになったものの、ダシュテキンは前述のインタビューで、トルコ人の間でもドラマの人気は上がりつつあると述べている。「ドラマの登場人物について、（在独の）トルコ人のコミュニティから好意的なフィードバックを得ているか」という質問に対しては次のように答えている。「僕より、チェムを演じているエリアス・エム・バレク。彼が役者として認識されているからだ。トルコ人はシリーズを喜んでいる。彼がチュニジア人のハーフだということはあまり気にしない。外国籍だということが重要だ。」トルコの少女の反応についてダシュテキンは、「ヤグムルのようにスカーフを被りながらも機知にとんだキャラクターがいるということに喜んでいる。名誉殺人のような極端な社会環境による問題ではなく、普通の家族問題がテーマになっていることも喜ばれている。ドイツ人は外国人からいつも実存的な話を求められているが、しかし、在独の外国人はただ単に無邪気な娯楽番組の世界の一部になることを望んでいる。」と述べている。

2012年という時点ではドイツにおいて国籍を問わず「ムルティクルティ」を「楽しい娯楽」として認識する温床が出来上がったと言えよう。その受容

状況の変化に大いに貢献したのが、ブレント・ツェーラン（Bülent Ceylan）というコメディアンを初め、移民の背景のある芸能人や役者のテレビ演出が増加し、「多文化」が日常に浸透していったことであろう。ツェーランは『トルコ語入門』の脚本家ダシュテキンと同様に、ドイツ人の母とトルコ人の父を持っている。二人とも「多文化」の背景を巧妙に利用し、トルコ人もドイツ人も笑いの対象にしている。その笑いの手法も実に酷似している。ショーでツェーランは、例えば、移民を嫌うドイツの右寄りの管理人、家事を一切手伝わないトルコの亭主関白など、様々な「型」や「ステレオタイプ」を大げさに演出し、誇張という手法によって滑稽化している。南ドイツ新聞の批評の表現を借りれば、そのステレオタイプを風船のように膨らませ、そして破裂させている。確固たるファンも多く、満席になるライブショー[53]の成功を評価して、ＲＴＬテレビジョン（RTL Television）は2011年からツェーランに単独のショーを任せている。ショーではツェーランが観客と直接に会話するという部分もあり、観客にはトルコ人もドイツ人も含め様々な人々がいるため、共通のユーモア感覚を模索しているようである。それは好ましい傾向だと言えるが、メディア上の「ムルティクルティ」は、はたして実際の「統合」と「多文化主義」の社会的実践に繋がるのだろうか。

娯楽の効果：「娯楽番組」は「統合」を促進する？

テレビの番組によって、移民の社会的な「統合」を促進したり、ドイツ人が移民に対して抱いている先入観や偏見を軽減したりすべきだという意見がしばしば見受けられる。統合推進のツィヴィス・ヨーロッパ・メディア賞の存在もテレビ番組によって「統合」や多文化の容認が推し進められるという認識に基づいている。『トルコ語入門』はツィヴィス賞を受賞したが、このドラマや映画によって、移民のドイツ社会への「統合」は促進されたのだろうか。本稿ではテレビ･ドラマと映画が直接社会に影響を与えるという立場に対しては疑問を投げかけたい。テレビ・ドラマや映画がより多くの人々に鑑賞され、好評価だったとしても、その結果「多文化主義」は実践される、あるいは実践されたのだという単純な流れにはならない。ドイツ人も移民や移民の背景がある人々も一緒に楽しめる「多文化主義」はあくまでもメディ

アという空間における「ムルティクルティ」であり、娯楽番組という形で受容されているからである。前述のエルフルト大学の調査でも、トルコ人とドイツ人が互いに抱いている先入観がドラマ鑑賞の前後ではあまり変わらないということで、その社会的効果が乏しいと指摘している。フリューの娯楽理論でも強調されているように、「娯楽」は自主的で強制できないものであり、「娯楽」の条件である「人間」「状況」「媒体」の適切な関係が、要素の一つでも変われば、娯楽として成り立たなくなるわけである。脚本家ダシュテキンは前述のインタビューで、実際の社会との繋がりを次のように否定している。「僕がどうして本当のトルコ人を役者に起用しなかったかをよくドイツ人に聞かれる。わけがわからない質問だ！ドキュメンタリー番組を作っているわけではないのに。」つまり、メディアを「統合」のために利用しようとするよりも、少数派出身の人のメディア参加を促進し、多様な受容者のために、多様な「娯楽の可能性のある」番組を提供することが重要であろう。それこそが、メディアや社会上での「ムルティクルティ」に繋がると言える。

結論

以上のことから、ラディオ・ムルティクルティや『トルコ語入門』のようなメディアでは、「ムルティクルティ」には「軽妙」や「娯楽性の高い」というニュアンスが付随し、異文化は「脅威」ではなく、面白いものとして認識されていることがうかがえた。そういった認識は、多数派社会による異文化の一方的な「消費」になりかねない。また、社会的な問題が矮小化される場合もある。しかし、このような負の側面だけでなく利点もおおいにある。「ムルティクルティ」の「軽さ」は政治的な議論でよく強調されている「深刻さ」に対して、釣り合いを保つ役割も果たしている。さらに、ドイツ社会は文化的多様性を認めない、「多文化社会」は存在しないのだと言う保守的な政治的主張に対して、ドイツは「多文化社会」であるという現実を人々に認識、浸透させるための役割も果たしている。それゆえに、メディアで扱われる「多文化」は軽くて価値のないものと、切り捨ててしまうよりも、メディアの「ムルティクルティ」がドイツ社会を今一度見直す機会のひとつに繋がれば、その意義は大きいだろう。

付記

石井香江先生に様々な貴重なご助言を頂き、心から感謝しております。

表1　ドイツのラジオの利用時間（分／日）[54]

	月－金曜日	土曜日	日曜日
全体	199	170	141
男性	210	163	133
女性	188	176	150
10-19歳	89	79	69
20-29歳	189	148	116
30-39歳	214	175	134
40-49歳	242	197	140
50-59歳	240	192	173
60-69歳	210	208	173
70歳以上	173	163	164

表2フンクハウス・ヨーロッパの番組表[55]

<table>
<tr><th>月</th><th>火</th><th>水</th><th>木</th><th>金</th><th>土</th><th>日</th></tr>
<tr><td colspan="5">6:00 宇宙（Cosmo）</td><td colspan="2">8:00 精神（Spirits）</td></tr>
<tr><td colspan="5">10:00 スーパー市場（Süpermercado）</td><td>10:00 グローバリスト（Globalista）</td><td>10:00マチネー（Matinee）</td></tr>
<tr><td colspan="7">12:00 広場（Piazza）</td></tr>
<tr><td colspan="5" rowspan="2">14:00　カフェ・モンディアレ（Café Mondial）</td><td>14:00 バルカン（Balkanizer）</td><td>14:00 メスティーソFM（Mestizo FM）</td></tr>
<tr><td>15:00 ラジオ・ポリス（Radiopolis）</td><td>15:00 ポルトガルに熱中（Lusomania）</td></tr>
<tr><td colspan="5" rowspan="2">16:00　新しいこと（Nova）</td><td>16:00 クレイジー（Çılgın）</td><td rowspan="2">16:00 カフェ・アラトゥルカ（Café Alaturka）</td></tr>
<tr><td>17:00 甘い生活（La Dolce Vita）</td></tr>
<tr><td colspan="5">18:00　ケルン・ラジオ（Köln Radyosu）</td><td rowspan="2">18:00 5惑星（5 Planeten）</td><td>18:00 クルド語に参加（Bernama Kurdî）</td></tr>
<tr><td colspan="5">19:00　ラジオ・コロニア（Radio Colonia）</td><td>19:00 ギリシャの任命（Elliniko Randevou）</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>月</th><th>火</th><th>水</th><th>木</th><th>金</th><th>土</th><th>日</th></tr>
<tr><td colspan="5">20:00　ラジオ・フォーラム（Radio Forum）</td><td>20:00 ビート・ザ・ナイト（Beat the Night）</td><td>20:00南駅（Estación Sur）</td></tr>
<tr><td colspan="5">21:00　ロシア語用のプログラム（Programma Na Russkom Jasyke）</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">21:00 アル・サウト アル・アラビ（Al-Saut Al-Arabi）</td></tr>
<tr><td colspan="5">22:00　ポーランド語・雑誌・ラジオ（Polski Magazyn Radiowy）</td></tr>
<tr><td>23:00 ジャングル・フィーバー（Dschungel-fieber）</td><td>23:00 ディスコ・ポリス（Discópolis）</td><td>23:00 巨大（Massive）</td><td>23:00 アフロポップ・ワールドワイド（Afropop Worldwide）</td><td>23:00 DJリツのショー（DJ Ritu Show）</td><td rowspan="2">22:00 ワールド・ワイド（World Wide）</td><td rowspan="2">23:00 ワールド・ライブ（World live）</td></tr>
<tr><td>24:00 ワールド・ミュージック・スペシャル（World Music Special）</td><td>24:00 魚の骨なしの音楽（Música sem Espinhas）</td><td>24:00 カラクタ共和国（Republik Kalakuta）</td><td>24:00 DJエドゥーのショー（DJ Edu show）</td><td>24:00 サイバージャム（Cyberjam）</td><td>24:00 グローバル・プレイヤー・セレクター（Global Player Selector）</td></tr>
<tr><td colspan="6">2:00 夜（Die Nacht）</td><td>1:00ジャザノヴァのラジオ・ショー（Jazzanova Radio Show）</td></tr>
<tr><td colspan="6"></td><td>3:00 夜（Die Nacht）</td></tr>
</table>

注

1　本稿はベティーナ・ギルデンハルトと渡邉紗代の共同執筆であるが、Ⅱ章は主に渡邉、Ⅲ章は主にギルデンハルトが担当した。

2「Parallelgesellschaft」は「平行社会」と訳されることもあるが、移民社会の中で異文化や多文化が「共存」する社会に対する反意語、つまり異文化や多文化が「共存」しているのではなく、交わりがなくただ存在しているだけの「並存」の状態を表す言葉であるという趣旨を汲み本稿では「並存社会」という訳語を用いている。

3　Steven Vertovec, Susan Wessendorf (Hg): *The multicultural backlash. European discourses, policies and practices*. Routledge, 2010、ではヨーロッパ各地の多文化主義に否定的な言説に関する詳細な分析が行われている。

4　Der Spiegel, 16.10.2010.
http://www.spiegel.de/politik/deutschland/integration-merkel-erklaert-multikulti-fuer-gescheitert-a-723532.html（2012年10月閲覧）
Die Welt, 17.10.2010.
http://www.welt.de/politik/deutschland/article10360199/Der-Tag-als-Multikulti-fuer-tot-

erklaert-wurde.html（2012年10月閲覧）

5　Karen Schönwälder: Germany: Integration policy and pluralism in a self-conscious country of immigration. In: Steven Vertovec, Susan Wessendorf (Hg): *The multicultural backlash. European discourses, policies and practices*. Routledge, 2010, S. 153.

6　Schönwälder(2010), S. 160.

7　ドイツ連邦共和国公共放送連合（ARD）が制作しドイツ全土で放送され、スイスやオーストリア、フランスなどヨーロッパ諸国でも放送された。

8　Vgl. Duden

9　関根政美『多文化主義社会の到来』朝日新聞社、2000、pp.41-42。「多文化社会化・多民族国家化の過程で摩擦・紛争を防ぎ、社会の安定的な統合のために考案されたのが多文化主義である。多文化主義は、国民国家は一文化、一言語、一民族によって構成されるべきだとする『同化主義』に基づくこれまでの国民統合政策を否定する。」

10　カナダでは1960年代前半に「多文化主義」の考えが主張し始められ、1971年に「多文化主義」は政策として採用されるようになった。他にも、オーストラリアやスウェーデンでも同じく1970年代に「多文化主義」政策が採られ始めた。

11　ユルゲン・ハーバーマス「民主的立憲国家における承認への闘争」、チャールズ・テイラー、ユルゲン・ハーバーマス　他（佐々木毅、他訳）『マルチカルチュラリズム』岩波書店、1996、pp.155-210、203頁。

12　ミシェル・ヴィヴィオルカ（宮島喬、森千香子訳）『差異―アイデンティティと文化の政治学』法政大学出版局、2009、pp.99-100。「『共和主義』の諸理念についての強硬な普遍主義の担い手たちは、その観点を押し付けようと、一九九〇年代を通じて、文化的承認の要求が民主的取り扱いを受けられるようにと求める人びとに、激しい調子で非難を浴びせた。後者の人びとは、フランスの思想生活におけるスティグマ化の回帰的やり口にしたがい『多文化主義者』といわれ、しばしば、『アメリカ流の』とおまけまでつけて『コミュノタリスト』呼ばわりされた。」

13　岡本奈穂子「フランクフルト市における多文化共生モデル―多文化局の戦略・政策・挑戦―」『ドイツ研究』第35号2002、pp.124-134、128頁。

14　Claus Leggewie: *Multikulti – Spielregeln für die Vielvölkerrepublik*. Berlin, Rotbuch Verlag , 1990. 2011年にこの著書はブルーメンカンプ社（BlumenkampVerlag）によって増補版の形で再出版された。

15　http://www.derwesten.de/staedte/bochum/vom-entdecker-des-multikulti-id1965306.html（2012年10月閲覧）

16　1990年版の前書き、Leggewie (2011), S. 30.

17　Seyran Ateş: *Der Multikulti-Irrtum*. Ullstein, 2007

18　Ateş(2007), S.14f.

19　例えば、移民の子供たちが独自の風習や文化習慣を理由に学校の授業に参加し

なかったり、就学しなかったり、あるいは強制結婚をさせているなどの事例が報告されているが、「多文化主義」の影響もありドイツ連邦政府は一方的に全てを禁止することはしていない。

20　2012年7月のデータを参照。Radiozentral:　Ergebnisse der ma 2012 Radio II im Vergleich zu ma 2012 Radio I.　2012 http://www.radiozentrale.de/site/994.0.html（2012年9月閲覧）

21　NHK放送文化研究所の「2012年６月全国個人視聴率調査」のデータを参照。http://www.nhk.or.jp/bunken/yoron/rating/index.html（2012年９月閲覧）

22　Radiozentrale: 6 Gründe für Radiowerbung. 2012

23　日本では一部のラジオ局の番組をインターネットで聴くことができるが、数としてはドイツと比較すると非常に少ない。

24　なぜこのようにドイツではラジオの聴取率が高いのかという詳細な分析は本稿では割愛するが、ドイツの生活習慣に「耳で聴く文化」が深く根付いていることが原因のひとつと考えられる。その背景には識字率や生活形態などが複合的に関連していると考えられる。

25　ドイツには9つの公共放送局と約430の民間放送局があり、公共放送局は聴取者からの受信料と広告宣伝から、民間放送局は広告宣伝からその財源を得ている。

26　rbbでは、ラディオ・ムルティクルティ以外にラジオベルリン88,8（radioBerlin88,8）、アンテナ・ブランデンブルク（Antenne Brandenburg）、フリッツ（Fritz）、ラジオ１（Radioeins）、情報ラジオ（Inforadio）、文化ラジオ（Kulturradio）の６つのチャンネルを提供している。

27　トルコ語、ロシア語、ポーランド語、アラビア語、クルド語、ペルシャ語、アルバニア語、スロバキア語、クロアチア語、セルビア語、ボスニア語、マケドニア語、スロベニア語、ベトナム語、ギリシャ語、スペイン語、イタリア語、フランス語、ポルトガル語、英語の20の言語で放送が行われている。また、創設当時はポルトガル語では放送されていなかったが、2004年から放送されるようになった。

28　2008年までのラディオ・ムルティクルティの具体的な活動は、渡邉紗代「ドイツにおける多文化主義と“Leitkultur” －『ラジオ・ムルチクルチ』と『世界文化の家』の活動とその背景―」（大阪大学修士論文）2004、と渡邉紗代「ドイツにおける多文化放送局の果たす役割―『ラジオ･ムルチクルチ』の活動を通して―」『言語文化共同プロジェクト2007「文化」の解読（8）―想像力としての文化―』大阪大学大学院言語文化研究科、2008、pp.43-52、を参照。

29　ただし、HP上の一部に「RADIOMULTIKULTI-BERLIN 106,8MHZ」と名前が残っている。番組内の放送では「Radiomultikulti」という番組名の宣伝は行われておらず、「Funkhaus Europa」とされている。また、ラジオ放送とは別に、ラディオ・ムルティクルティの「異文化間のコミュニケーションの促進」や「偏見のない寛

容な社会の促進」などの目的を受け継ぎ、ウェブプロジェクトとして2008年から新たに「ラディオ・ムルティクルト2.0（radio multicult2.0）」が開始された。このラディオ・ムルティクルト2.0の詳細な活動は今後引き続き調査を行う予定であり、本稿では割愛する。

30「フンクハウス（Funkhaus）」はドイツ語で「ラジオ放送局」を意味する。

31　資金不足によって多言語放送局が閉鎖される事例は日本でも起こっている。日本初の多言語放送局として開設された大阪のFM COCOLOも2012年３月で閉鎖されたが、日本で暮らす外国人のために情報を提供するという趣旨を受け継ぎFM802が2012年４月から運営をしている。番組内容は変更されたが、「FM COCOLO」という名称は残されている。ただし、1995年の阪神淡路大震災時に日本在住の「外国人」が言葉の問題から情報収集をするのが困難であったという事実を受け、このような人々を支援するという目的もありFM COCOLOは創設されているので、移民とドイツ人の「統合」を促進するというラディオ・ムルティクルティの設立目的とは少し異なっている。

32　トルコ語、ポーランド語、イタリア語、クルド語、ボスニア語、ギリシャ語、クロアチア語、スペイン語、セルビア語、アラビア語、ロシア語、フランス語、英語、ポルトガル語の14の言語で放送が行われている。

33　WDRでは、フンクハウス・ヨーロッパ以外に1LIVE、WDR2、WDR3、WDR4、WDR5の５つのチャンネルを提供している。WDRはフンクハウス・ヨーロッパ以外の各チャンネルの名称を数字で表しており、rbbとは異なっている。

34　例えば、Portofolioなど。

35　トルコ語で放送されている番組は月～金曜日18 ～ 19時「ケルン・ラジオ（Köln Radyosu）」、イタリア語は月～金曜日19 ～ 20時「ラジオ・コロニア（Radio Colonia）」、ボスニア語･セルビア語･クロアチア語は月～金曜20 ～ 21時「ラジオ･フォーラム（Radio Forum）」、ロシア語は月～金曜日21 ～ 22時「ロシア語用のプログラム（Programma Na Russkom Jasyke）」、ポーランド語は月～金曜日22時～ 23時「ポーランド語・雑誌・ラジオ（Polski Magazyn Radiowy）」、フランス語は水曜日24 ～２時「カラクタ共和国（Republik Kalakuta）」､英語は木曜日23 ～ 24時「アフロポップ･ワールドワイド（Afropop Worldwide）」と24 ～２時「DJエドゥー（DJ Edu show）」、木曜日23 ～ 24時「DJリツのショー（DJ Ritu Show）」、土曜日22 ～ 24時「ワールド・ワイド（World Wide）」、ポルトガル語は日曜日15 ～ 16時「ポルトガルに熱中（Lusomania）」、クルド語は日曜日18 ～ 19時「クルド語に参加（Bernama Kurdî）」、ギリシャ語は日曜日19 ～ 20時「ギリシャの任命（Elliniko Randevou）」、スペイン語は日曜日20 ～ 21時「南駅（Estación Sur）」、アラビア語は日曜日21 ～ 23時「（Al-Saut Al-Arabi）」がある。

36　前掲載20と同様。

37　Sonja Weber-Menges: Die Entwicklung der Ethnomedien in Deutschland. In: Rainer

Geißler, Horst Pöttker (Hrsg.): *Integration durch Massenmedien Mass Media-Integration*. Bielefeld, 2006. S.121-145.

38 Weber-Menges(2006), S.121.

39 例えば、ドイツの映画「サラミ・アレイクム」に関する映画評Zeit online, 22.07.2009, Katja Nicodemus: Naher deutscher Osten. Die charmante, aber holprige Multikulti-Komödie „Salami Aleikum“ von Ali Samadi Ahadiやイギリス映画「西洋は西洋」に関する映画評Spiegel online, 14.06.2012, Daniel Sander: Multikulti-Komödie „West is West“. Klischee ist Klischee.

40 例えば、「イギリスの多文化主義でしばしば批判を浴びた3 S（Samosa, Sari, Steel Drum）同様、日本の「多文化共生」においても「多文化」を3 F 、すなわち「衣（fashion）」、「食（food）」、「祭（festival）」に還元される傾向がみられる。」日本移民学会（編]『移民研究と多文化共生』（日本移民学会創設20周年記念論文集）、御茶の水書房、2011、５頁。

41 Werner Früh: *Unterhaltung durch das Fernsehen. Eine molare Theorie*. Konstanz, UVK Verlagsges., 2002.

Werner Früh, Hans-Jörg Stiehler (Hg): *Theorie der Unterhaltung. Ein interdisziplinärer Diskurs*. Köln, Halem, 2003.

詳細な説明ならびに考察は省略し、本稿の考察のために参考になる部分のみを取り上げた。

42 Früh (2003), S. 30ff.

43 Süddeutsche Zeitung, 17.05.2010, Tom Schimmeck:Alles so schön gaga hier.
http://www.sueddeutsche.de/kultur/-staffel-tuerkisch-fuer-anfaenger-alles-so-schoen-gaga-hier-1.544789 （2012年10月閲覧）

44 Spiegel online, 27.03.2007, Christian Buß: Gottes rosa Höschen

45 Janina Henning, Franziska Spitzner, Sabine Reich: “Türkisch für Anfänger“ – ein raffiniertes Spiel mit ethnischen Klischees?
http://www.migration-boell.de/web/diversity/48_1251.asp（2012年10月閲覧）

46 http://www.grimme-institut.de/html/index.php?id=46 （2012年10月閲覧）

47 http://www.civismedia.eu/ （2012年10月閲覧）

48 TV Wunschliste, 26.03.2007, Ralf Döbele
http://www.wunschliste.de/tvnews/1652 （2012年10月閲覧）

49 Bayrisches Fernsehen, 24.04.2012.
http://www.br.de/fernsehen/bayerisches-fernsehen/sendungen/kino-kino/tuerkisch-fuer-anfaenger-zwei-millionen-besucher100.html（2012年10月閲覧）

50 Der Tagesspiegel, 18.03.2012.
http://www.tagesspiegel.de/zeitung/drehbuchautor-dagtekin-ich-bin-ein-kommerzschwein/6337292.html（2012年10月閲覧）

51 詳細は、森孝一（編）『EUとイスラームの宗教伝統が共存できるか―「ムハンマドの風刺画」事件の本質』明石書店、2007

52 Der Tagesspiegel, 18.03.2012.
http://www.tagesspiegel.de/zeitung/drehbuchautor-dagtekin-ich-bin-ein-kommerzschwein/6337292.html（2012年10月閲覧）

53 2009年にマンハイムでは1万人の来客があった。

54 前掲載20と同様、2012年7月のデータを参照し作成。

55 フンクハウス・ヨーロッパのHP（http://www.funkhauseuropa.del）を参照。

Zusammenfassung auf Deutsch

Das Konzept „Multikulturalimus“ wird in Deutschland seit Mitte der 1980er Jahre heftig diskutiert. Seine Bedeutungsnuancen variieren je nach politischer Position zwischen negativ konnotierter Wertebeliebigkeit und positiv gesehener kultureller Vielfalt und spiegeln die konfliktreiche Transformation Deutschlands zu einem Einwanderungsland wider. Von der jetzigen Bundesregierung wird das Konzept abgelehnt, dennoch gibt es politische Maßnahmen, die ein multikulturelles Zusammenleben fördern. Der vorliegende Aufsatz behandelt, - mit besonderer Konzentration auf den Begriff „Multikulti“, der sich als saloppe Form von Multikulturalimus im alltäglichen Sprachgebrauch eingebürgert hat, - zwei Beispiele aus den Medien, die einen großen Einfluss auf die Wahrnehmung von Multikulturalismus jenseits des politischen Diskurses hatten: den Radiosender „Multikulti“, der 1994 in Berlin gegründet wurde, und die Multikulti-Komödie „Türkisch für Anfänger“, die 2006 bis 2008 in der ARD gesendet und 2012 erfolgreich verfilmt wurde. Bei der Untersuchung zeigt sich, dass der Begriff „Multikulti“ im Bereich der Unterhaltungsmedien spezifische Bedeutungsnuancen erhalten hat, die sich von denen des politischen Diskurses unterscheiden. Dem Konzept werden hier Konnotationen wie „leicht“ und „unterhaltsam“ verliehen. Darin birgt sich einerseits die Gefahr, dass kulturelle Konflikte verniedlicht werden.

Andererseits bietet sich dadurch auch die Möglichkeit eines positiven Zugangs zur multikulturellen Gesellschaft. Durch die Behandlung dieser Facetten von „Multikulti“, die im Schatten der politischen Auseinandersetzungen wenig Beachtung finden, hofft der Aufsatz zu einem breiteren Verständnis von Deutschland als Einwanderungsland beizutragen.

„Multikulti“ – aspects of multiculturalism in Germany

Keywords: multiculturalism, immigrant society, radio, entertainment